

提出日：平成 24 年 1 月 20 日

大学生の児童虐待認知と共感性との関連

The relationship between awareness of child abuse and empathy in university
students

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻 1000-100715 友森 貴裕

主指導教員 井上僊久和教授

<問題>

近年、児童虐待研究において虐待の認知を扱ったものが見られるようになってきている。先行研究では虐待事例と関わるものが想定される専門家を対象とした研究は多い（柳川ら,2008；上野ら,2010）が、非臨床群の母親や大学生を対象とした研究は比較的少ない。加えて、先行研究では調査対象者の児童虐待認知の把握（高橋ら,1996；村田,2008）や、対象者間での児童虐待認知の違いを報告する研究（高橋ら,1997；鈴木ら,2001；森ら,2010）が行われている。これらの研究からは、児童虐待行為において生命に危険を及ぼす行為や外傷を伴う行為、性的虐待に関する行為は虐待であると判断することが多い（高橋ら,1996；八重樫,2005）が、一方でネグレクトや躰ともとれるような行為については認知が低い（鈴木ら,2001 八重樫,2005）こと、男性に比べて女性の方が児童虐待認知が高いこと（鈴木ら,2001；鈴木ら,2002；佐藤ら,2003）、学生に比べて親の方が児童虐待認知が高いこと（八重樫,2005；森ら,2010）、子どもに関わる専門職者の間でも児童虐待認知に差があること（高橋ら,1997）などが分かっている。しかし、児童虐待認知に影響を及ぼす要因についての検討を行った研究は少なく、特に心理的要因に関する研究としては中嶋（2005b）により一般の保護者を対象とした児童虐待認知と育児意識要因からの検討が行われ、養育行動の柔軟性の高い者は児童虐待認知が高いことを明らかにしているものの、こういった児童虐待認知と心理的要因との検討を行っている研究は極めて少ない。今後、児童虐待認知に影響を与える心理的要因を明らかにし、心理教育や啓発活動に応用することができれば児童虐待予防に繋がる知見を得ることができると考えられ、この分野の研究を進めることは臨床的意義があると考えられる。さらに、これらの研究では主に虐待行為に相当する質問項目間で回答の差を見ているものが多く、多変量解析にて児童虐待認知との関連を検討できる尺度としての信頼性や妥当性が備わっていないことや、多くの回答者が虐待であると判断するような項目が多いこと、心理的虐待の定義にあるドメスティックバイオレンス（以下 DV）に関する項目が含まれていないことも指摘できる。よって、児

児童虐待認知研究を進める上では、上記の点について改良された児童虐待認知尺度の開発も必要であるといえる。

児童虐待認知に影響を与える要因としては児童虐待に関する知識や共感性が考えられる。特に共感性との関連については中嶋（2005b）が児童虐待認知と育児意識要因に関する研究の中で、子どもへの共感性が低い群は共感性が高い群に比べ、身体的虐待に関する項目で有意に虐待認知が低いことを明らかにしている。しかし、共感性を多次元的に捉えての検討は行っておらず、より詳細に共感性と児童虐待認知の関連を検討することで新たな知見が得られる可能性があると考えられるため、本研究では児童虐待認知と共感性の関連を中心に検討していくことにする。

<目的>

第1研究では、これまでの研究で使用されていた尺度に代わる児童虐待認知を測る尺度の作成を試み、その信頼性と妥当性の検討を行う。第2研究では、第1研究で作成した尺度を用いて先行研究にて挙げられた、児童虐待に関する知識及び共感性と児童虐待認知との関連を検討する。本研究の仮説は、これまでに児童虐待認知と多次元的に捉えた共感性との関連について検討された研究が見られないことから「共感性が高い者は児童虐待認知も高いであろう」というものに留めておき、仮説が検証された場合、さらに児童虐待認知と共感性の関連を探索的に検討していくことを試みる。

<第1研究>

方法

児童虐待防止法に掲げられている虐待行為の内、倫理的配慮として『性的虐待』を除いた3つの行為について先行研究から質問項目を収集し、全45項目の児童虐待認知尺度を作成した。その後、信頼性と妥当性を確認するために大学生を対象に質問紙調査を行った。妥当性の確認の際には社会的望ましさ尺度短縮版（北村ら,1986）の10項目と日本版 Parental Bonding Instrument:PBI（小川,1991）の養護因子12項目に鈴木ら（2002）で行われている方法を踏襲し、過保護因子に含まれている「私のプライバシーをおかした。」という項目も養護因子に含めた13項目を使用した。

結果と考察

因子分析の結果、児童虐待認知尺度は『心理的虐待』10項目、『ネグレクト』6項目、『身体的虐待』4項目の全20項目から構成される3因子構造であることが確認された。また、内的整合性から信頼性が確認され、社会的望ましさ尺度短縮版から弁別的妥当性が確認さ

れたが、PBI との収束的妥当性は確認されなかった。PBI と本尺度との関連が見られなかったのは、本尺度で設定された質問項目が従来使用されていたものに比べ、虐待かどうかの判断に迷うような虐待行為を扱っていることから、母親からの被養育経験が児童虐待認知に影響を与えない可能性があることが示唆された。

＜第 2 研究＞

方法

大学生を対象に児童虐待認知尺度と鈴木ら（2008）の多次元共感性尺度（Multidimensional Empathy Scale: MES）及び児童虐待に関する知識を把握するために先行研究を参考に 5 項目の質問を設定し、質問紙調査を行った。また、一部の回答者を対象に児童虐待認知尺度について再検査信頼性の検討も並行して行った。

結果・考察

各下位尺度において十分な再検査信頼性係数が得られた。また、児童虐待に関する知識の高低によって児童虐待認知に差は見られなかった。さらに、女性において MES 合計点が高い者は低い者に比べて児童虐待認知尺度合計点、心理的虐待得点が高いことが分かった。MES の下位尺度との検討において、「視点取得」が「心理的虐待」、「児童虐待認知尺度合計」に負の影響を与え、「他者指向的反応」が「ネグレクト」、「心理的虐待」、「児童虐待認知尺度合計」に正の影響を与え、「自己指向的反応」が「ネグレクト」、「心理的虐待」、「児童虐待認知尺度合計」に正の影響を与え、「被影響性」が「ネグレクト」に負の影響を与えていた。本研究では、女性において「他者指向的反応」や「自己指向的反応」といった共感性の感情的側面で、応答的な反応が児童虐待認知を高めることが示唆された。一方、本研究における共感性の認知的側面である「視点取得」の高い者は回答する際に虐待をする親側の視点に立ったことから、児童虐待認知に負の影響を与えた可能性が示唆された。また、「被影響性」が高い者は共感性を向ける相手から受け取った感情の対処がうまくできず、子どもとの関わりが疎遠になることから、ネグレクトへの認知に負の影響を与える可能性が考えられた。

＜総合考察・今後の課題＞

共感性の感情的側面で、応答的な反応を育む方法として、子どもの頃から広い範囲の感情を経験する機会が提供されることが考えられ、そうすることで親になった時に児童虐待が予防されると考えられた。今後の課題としては、児童虐待認知尺度の妥当性の検討や視点取得と児童虐待認知との関連について再検討することなどが考えられた。